

猛暑とコロナが 8月の野菜高招く

7月の曇天続きから一転し、8月は猛暑になった。野菜の生育にはアッパーからストレートとダメージが大きかった。平均単価は7月が前年より25%高かったのに続き、8月は28%高くなった。前回紹介した加工業務用需要も夏場の家庭需要も高いレタスは26%も入荷が減って6割高になったほど。小売では

1玉300円近い価格になっても、猛暑対策で熱中症も心配、夏休みでも外出自粛などと、家庭用で食できるから強含みは続いてきた。この天候推移では野菜の入荷減と単価高は必然だが、高騰、暴落の原因となる業務用需要など、コロナ関連との綱引きはどうだったのか。

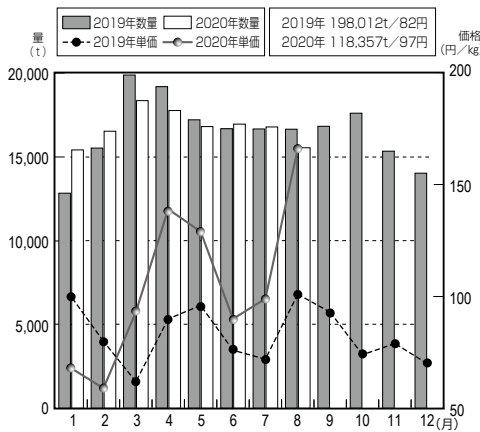
キャベツ

【概況】
小売で1個300円超える高騰続く、引き続き強い業務用と家庭の需要も

東京市場における8月のキャベツの単価は、高かった4~5月より7%減り、はるかに高いキャベツ66円となった。7月より68%、前年より66%高い。小売店頭価格は消費税を含めると1玉320円を超えた。春の高値は冬産地・愛知の切り上がり早く、それに対して関東産が不足分を補完できなかったから。7月は長野産が振るわない分を主産地・群馬がカバーしたが、8月も長野が回復せず、群馬も出荷れもあって入荷が減った。

【今後の対応】
9月は例年まだまだ群馬が8割近い主産地であり、今年も十分に供給能力はある。問題は、昨年は作柄が良くなかった長野のカバーに、北海道や東北、さらに茨城、千葉など関東産地が出荷を増やしたが、今年には猛暑で出荷の余裕がない。9月上旬には遅れていた産地がやや追いついてきたが、秋以降に例年は数量を増やす関東勢が今年には未知数。コロナ事情にも慣れて需要面での対応はほぼ見通しがつくが、猛暑が生育にどう影響したかまだ見えない。

【背景】
キャベツは、周年にわたって需要があり、業務用でも家庭用としても必需・常備野菜である。本来、冷涼な気候に合う作物であり、寒玉や雪下キャベツなど冬に美味しい野菜だ。夏野菜としてのキャベツは、群馬から長野、東北の産地から供給されるものの、生育期7月の日照不足と、8月に入ってから突然の猛暑。そこに、コロナ関連で、引き続きた外出自粛で家庭食として必要な一方、外食も一部解禁されたことで、7月よりも業務用需要は強くなった。



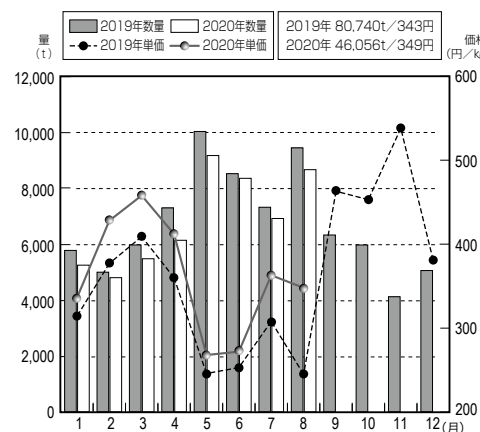
トマト

【概況】
生産も需要も最盛期に減り4割高、産地が関東に戻る秋に依然不安感

東京市場における8月のトマトは、前月7月より25%も増えたものの、前年に比べると8%減で単価は43%高くなった。6月が平年並みだったのに、7月は曇天、日照不足もあり前月より17%もの入荷減だったが、18%程度高くなっただけで済んでいた。コロナ禍により業務用需要からの引きが弱かったからだ。ところが、8月には6月以上に数量は増えたが、本来8月は年間の最盛期で単価も250円を下回るはずの月である。

【今後の対応】
9月は、北海道や福島などの夏秋期大型産地からの出荷が中心にはなるものの、10月以降主産地となる群馬、千葉、茨城が始まる。しかし、生育期8月の猛暑はスタートを迎えるはずの関東勢に不安をもたらす。北海道もさすがに末期となっていくため、関東産地をカバーするだけの余力は残っていないはず。ただし9月は、例年8月の需要量からガクンと少なくなる。徐々にコロナ第2波も沈静化に向かっていくだろうことを考えると、需要面も落ち着くか。

【背景】
トマトは、やはり年間を通して需要がある品目で、夏秋野菜の代表、夏が大好きな果菜類だ。需要は業務用も底堅く、子供にも好まれ、夏が旬で価格も下がるため、家庭用野菜としても人気がある。7月に続いた曇天から8月は急激に暑さが襲来したことで、植物生理に異変が生じて作柄は思わしくない。冬並みの単価となってしまった。8月の主産地は福島、青森、北海道を含む東北だが、青森、岩手、秋田からの入荷が2割前後減り、北海道がひとり頑張った。



今年の市場相場を読む

長ネギ不作に引つ張られて高値に、佐賀が高知撤退のあと補完産地に

小ネギ

【概況】

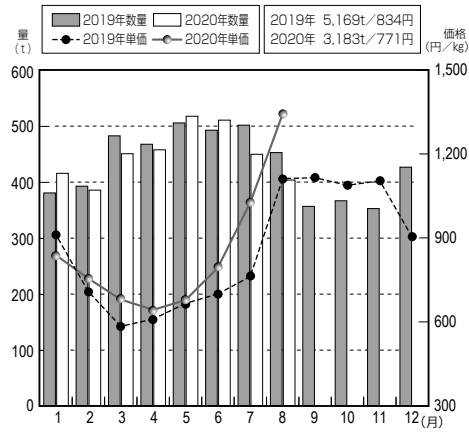
東京市場の8月の小ネギの入荷は、前月比、前年比ともに1割程度少ないが、7月の単価は35%高く、8月は21%高くなった。暑くなった8月には薬味需要が強くなる分もあって強含みで動くものだ。今年の場合には天候推移が悪影響となつて長ネギの生育に大きなダメージとなった。その分、ネギ類全般に引きが強くなったものの、3割を占める主産地・福岡がここ1〜2年、水害等自然災害の直撃で安定性に不安がある。

【背景】

小ネギは、やはり薬味需要が強い夏場には消費も活発になるのに合わせ、出荷も増える作型になっている。関東では、業務用の薬味としても長ネギが使われるが、家庭用としては小ネギに軍配が上がる。小ネギは本来、水耕栽培も多く、天候異変には比較的強いが、8月に回復した業務需要が長ネギに対する引きを呼んだ。露地栽培のため、もともと自然災害には弱い品目だが、中国産が常に補完体制にあり、暴騰があつても一時的で構造的なものではない。

【今後の対応】

9月も例年、やはり薬味需要は衰えないし、今年はとくに残暑が厳しい。産地は、福岡、静岡、大分、千葉と不動のラインアップだが、近年、佐賀が生産を増やしており、東京市場の入荷減に迅速に対応している。高知が小ネギ生産から撤退した分、補完産地が欲しかったところだが、佐賀は大分同様、師匠・福岡から学んでいる。注目されるのが、京都がまだ2〜3%といえども入荷数量が安定化する傾向にあり、九条ネギの実需が生まれていることだ。



セルリー

長野産の生育遅れで5割高にも、需要も堅調に戻って落ち着くか

【概況】

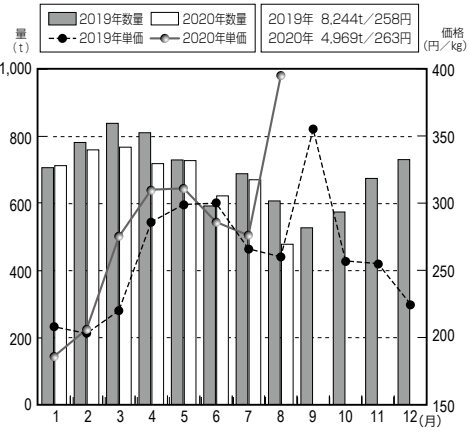
東京市場の8月のセルリーは、7月がごく平年並みながら、ちょっとした異変があつた。7月より3割も入荷減で52%高くなったのだ。セルリーはいまや周年にわたって一定の需要があり、輸入品を軸に需給関係が調整されている品目だ。小売用も業務用も、品揃え商材・食材であり、国産はもちろん、輸入品も卸売市場経由が多い。ただし、8月は長野産が95%前後のシェアがある時期だが、今年は気象由来の生育遅れで前年から25%減つた。

【背景】

セルリーは、業務用については年間通じて一定の需要があるが、スーパーでも品揃えされている。夏場にはとくに、サラダとしての家庭需要も増す時期だが、長野産のフレッシュさが認知されているようだ。冬場は静岡、愛知、福岡、香川など、洋菜産地がシェアを分け合いながら需要に対応しているが、輸入品は年間通じて入荷している。なお、この8月には北海道が長野産の減少に対応するかのよう4割も出荷を増やした。潜在的な供給力がある。

【今後の対応】

9月でも9割を超える長野が中心ながら、昨年は北海道と米国がカバーしていた。今年は長野が遅れを取り戻してくれば、例年並みの商状となるだろう。この時期はやはり長野が主役なのである。業務用の回復や、自宅待機の間料理メニューがあり、そこでセルリーを使う機会があった消費者から需要が生まれる可能性もあり、需要は堅調と見る。あまり目立たないが、セルリーは輸入依存の部分を国産が埋めつつある。産地連携した販促企画も欲しい。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。